授与機関名　順天堂大学

学位記番号　乙第 2409 号

Atopic Glaucoma: Clinical and Pathophysiological Analysis

（アトピー緑内障: 臨床的及び病態生理学的解析）

小林　加苗（こばやし　かなえ）

博士（医学）

論文内容の要旨

我々はアトピー性皮膚炎の眼合併症としてアトピー緑内障を提唱している。アトピー性皮膚炎に伴う緑内障は、皮膚炎の治療で使用されるステロイドによる副作用で眼圧が上昇し発症する（ステロイド緑内障）としばしば考えられてきた。しかしステロイド忌避のアトピー性皮膚炎患者においても緑内障を発症することがあること、またアトピー性皮膚炎合併緑内障症例の多くが深刻な視神経障害や白内障、網膜剥離の合併により視力予後が不良であること、手術を要するほど高眼圧となることが多く、さらに眼表面の瘢痕形成により治療に難渋することから、緑内障もアトピー性皮膚炎の重篤な合併症の一つであり、アトピー緑内障という一つの病態として捉えられると考える。

今回 45 人のアトピー性皮膚炎合併緑内障の患者をレトロスペクティブに調査し、アトピー緑内障の臨床的特徴を調べた。アトピー緑内障はアトピー性皮膚炎罹患歴の長い青壮年男性に好発しており、著しい眼圧上昇と視野障害をきたし、多くは手術加療が必要となり濾過胞感染などの合併症も多かった。また、アトピー緑内障症例の前房水中の炎症性サイトカイン濃度を測定し、対照の加齢性白内障、開放隅角緑内障（OAG）と比較したところ、炎症性サイトカインの IL-8 と CCL2 が加齢性白内障と比べアトピー緑内障で有意に高かった。さらに、アトピー緑内障症例と OAG 症例の線維柱帯組織を電子顕微鏡で観察し、房水流出路の組織の相違点を調べたところ、アトピー緑内障の線維柱帯では強角膜網と傍シュレム管結合組織の間隙に 10-30 nm の微小管の異常な蓄積を認め、OAG やステロイド緑内障とは異なる所見を得た。これらの結果から、アトピー緑内障はステロイド緑内障とオーバーラップする部分もあるが OAG ともステロイド緑内障とも異なる独立した病態であり、炎症の関与により重症化しやすいものと考えられた。